

コメントシートの「小泉への質問」に答えます。

これらの質問は、私の英語科教育法を受講する学生たちが、模擬授業の計画と実践をする中で、コメントシートに書いてきたものです。なかなか深いところを突くものが多いです。

目次：

1. Will と be going to	1
2. Will の使い分け	1
3. 文法の解説も英語でしたい	2
4. なぜ音読は大切か	3
5. 音読だけで理解が深まるか	4
6. 音読の順序を教えてください	4
7. Read & Look Up は中学生に難しくないか	5
8. 教科書はいつもリスニングから始める？	6
9. 新出単語の導入はいつ？	7
10. 小学校での既習事項を中学校でどのように扱うか	8
11. 本文について発問する際に未習の表現を使ってよいのか	8
12. 文法の導入、本文を扱う前か後か	8
13. Oral drill が十分かどうかの評価	9
14. Small talk での文法導入で、生徒にもっと考えさせたい	9
15. Small Talk で何ができるのか	11
16. 授業内の評価のポイントはどの活動で見極めるか	11
17. 英語の授業で生徒をどう呼べばよいか	13
18. 気づきを促すためにはどうするか	14
19. 文法指導、学校現場でインプットやアウトプットは十分か。	15

1. Will と be going to

Q: Will と be going to の使い分けは、中学生には難しくありませんか。

A: 「この場面ではどちらを使う？」というようなクイズにしてみると、難しくなると思います。そうではなく、それぞれを別々のものとして指導しましょう。場面に応じて使えるようにしてやるのが目標です。

解説: 文法規則として教え、区別できるようになれば、と生徒に要求するのは、かなりキツイことだと思います。まず、受容能力として、be going to が使われている場面を読んだり聞いたりして、「予定は何ですか」と問われたら答えられるようになる、それを目指せばよいのです。それができるようになったら、使う場面を与えて「明日のプランを言ってみよう」「部活の予定を書いてみよう」というように、be going to を使って発表能力を鍛えることができます。そういった指導をしっかりと行ってから、「be going to は予定を表す未来表現なのだよ」と、まとめてやればよいのです。

Will についても同様で、適切な場面を与え、その表現の持つ働きを理解することに慣れさせ、「受容能力」→「発表能力」の順で使えるようにしてやります。それが済めば be going to と比較できるようになるのです。

もちろん、英語の知識や技能は、一度教えたらすぐ使えるようになるわけではありません。中学校3年になり、高校生になるまでに、何度も何度も目にするうちに、いつのまにか使い分けられるようになっていた、というぐらいで良いのです。(28 April 2019)

2. Will の使い分け

Q: Will は「予測や自然ななりゆき」、また「その場での決意（一人称）」や「依頼（二人称への疑問形で）」という使い分けを学びました。second language learner としてこのような複雑な知識が必要なのでしょうか。

A: 生徒に抽象的な知識として与えるのではなく、状況と場面を用意して練習させれば、決して難しいことではありません。英語教員になる人には、一般的な文法知識として、ぜひ知っておいてほしいことです。

解説: ひとつ前の質問への回答とも共通しますが、場面があれば適切に理解できることが学習者（second language learner）としての第一目標です。そして、それが必要なときに使えるようになることが次の目標です。そしてさらに、ルールとして一般化できるようになることがいちばん高い目標で、それは英語を専門とする人なら、当然目指すべきレベルだと思ってください。

4月25日の授業で私が皆さんに伝えたかったことは、英語の教員として知っておくべき

文法の整理の仕方なのです。皆さんは英語コミュニケーション学科で教職課程を履修している大学生なので、この区別は必要な知識と考えてください。これをそのまま生徒に与えるかどうかは別の問題です。これらは、コミュニケーションの場面と状況をきちんと設定して、言語活動で使わせたりして、声に出して英語のまま記憶に残すようにしっかり扱っておけば、中学生としては十分かもしれません。でも、高校生になれば、生徒の学習段階や個々の理解力などによって差はありますが、教える側の配慮があれば、規則として理解できるようになり、自分から使い分けようとするようになるでしょう。(25 April 2019)

3. 文法の解説も英語でしたい。

Q：文法の説明をするときに、どこまで英語でしてよいのか、判りません。

A：文法規則を英語で説明して、生徒に理解させるのはとても難しいことです。文法の説明は日本語でしてよいのです。

解説： 文法規則を英語で説明して、中学生に理解させるのはとても難しいことです。文法の説明は日本語でしてよいのです。ただし、次の原則を踏まえる必要があります。

- (1) 文法説明は Oral Drill や場面のある口頭練習を十分にしたあとで行うこと。
- (2) 説明の日本語が平易で簡潔であること
- (3) 生徒にとって馴染みのない語句や表現が含まれないこと
- (4) 説明が抽象的でないこと
- (5) いちどに複数の文法規則を教えないこと
- (6) 文法用語は生徒が規則を理解してから教えること

高校生が相手であれば、生徒のレベルにもよりますが、文法規則を英語で説明することは可能です。しかし文法という話題は、日常の話題でもなく社会やマスコミでよく話題になることでもなく、言語学的な概念の説明です。生徒にとって未知の、抽象的知識への導入ですので、文法用語の乱用をしてはなりません。上の6つと同様の原則があります。これらを満たした英語の説明ができるためには、教師に、正確な文法知識と、それを平易に伝える教師英語 (teacher talk) の力が必要です。そしてかなり丁寧な準備も必要となるでしょう。

- (1) 文法説明は Oral Drill や場面のある口頭練習を十分にしたあとで行うこと
- (2) 説明の英語がきわめて平易で簡潔であること
- (3) 文法用語に限らず、生徒にとって未習の語句や表現が含まれないこと
- (4) 説明が抽象的でなく、具体的な例を含むこと
- (5) いちどに複数の文法規則を教えないこと
- (6) 文法用語は生徒が規則を理解してから教えること

(25 April 2019)

4. 音読の大切さ

Q：音読をたくさんさせることが、なぜ大切なのでしょう。

A：音声化できることが言語の知識として必要なのです。文字だけ見て覚えた文は、いろいろな点で不十分で、使える知識になりにくいのです。

解説： 文字からのアプローチだけでは不十分な理由を3つ上げましょう。

その1：最も自然な言語習得のかたちが、音声言語を理解し、話せるようになり、読めるようになり、書けるようになる、という順序だからです。新生児には音声は欠かせません。母語であっても外国語であっても、ことばを覚えるときに音声なしで文字だけしか使えないとなったら、とても不自由だと思います。単語の意味を学ぼうというとき、つづり (visual image) だけを記憶するのは不十分です。聞いて理解できるためには、その語の持つ「聞こえ (acoustic image)」も共に記憶される必要があります。中学校になって英文を読めるようになるためには、単語や句のレベルだけでなく文のレベルでも、音声と文字上の意味が一体化するように学ぶことが大切なのです。

その2：仮に、単語は音声を用いて学び、文のレベルでは音声なしで英語を学んだ人がいるとします。その人が英文法の知識を得て単語をつなぎ合わせれば、話せるようになるでしょうか。きっと、昔のSF映画の宇宙人のように、平板な語が切れ切れに連続するだけの感情のない発話になることでしょう。自然な言語習得のプロセスでは、文のレベルでのアクセントやリズム、イントネーションなど、いわゆる「プロソディ」が理解され、音声の意味と一体になって記憶に刻み込まれることが不可欠なのです。特に英語と日本語は、文法だけでなく音韻体系も異なる言語ですので、なおさら声に出す機会を十分に確保するべきです。

その3：日本人の英語の弱点は音声言語だと、昔から指摘されています。小学校英語では音声面の訓練が重要ですが、中学校に入り扱う英語は複雑になるのに、学年が上がるにつれ、音声よりも文法や和訳に時間を割くことが多くなります。それは高校まで続き、結果的に日本人の多くが英語を聞けないし話せないようになってしまうのです。もちろん、中学校でも、話すことと聞くことの言語活動を重視していますが、40人近い日本の教室では、コミュニケーションを体験させることはできても、文レベルでの発音練習やプロソディの練習はどうしても不足します。音読は、そのような環境の日本の英語教育において、fluentに聞き話せるようになるための大切な訓練の第一歩なのです。(25 April 2019)

5. 音読だけで内容が理解できるだろうか。

Q: たくさん音読をさせても、意味が解らないままの生徒が残ってしまいましたか。どうしたらよいのでしょうか。やはり和訳はしたほうがよいではありませんか。

A: 教師が和訳を与えて理解させたつもりになっても、生徒の頭には日本語での記憶が残るだけかもしれません。内容をより確実に理解し、英語を英語で記憶に残すさまざまな方法を試みましょう。音読はそのひとつです。

解説: 本文を読む前に、解りやすい oral introduction を与え、しかも学習目標の表現の oral drill を introduction に絡めてたっぶりやるならば、内容の理解はかなり進みます。もちろん、それだけでは、本文の意味を取れていないのでは？と不安が残るので、多くの教員は、つい和訳を入れたくなります。でも、音読の前のいろいろな指導で、内容を理解させていれば、音読は内容を確認するための時間になります。授業では、oral introduction のあとに本文を見せ、生徒同士で相談させ、guiding questions に答えさせたり内容に関する Q&A を生徒に作らせたりしながら、いろいろな形で本文にアプローチさせてください。

また教科書本文には、学習目標の文法や表現以外にも見逃せない熟語などが出ています。新出語やそれらの表現に注目させ、声に出して練習することで確認します。そのような中で、どうしても和訳を付けなくてはならない部分、和訳しなくても解る部分を見分けましょう。

もちろん、音読は、内容理解が済んでから行うものです。(25 April 2019)

6. 音読指導の順序を教えてください。

Q: 音読をさせる方法は、いろいろあると聞きますが、指導に決まった順序はあるのでしょうか。例えば、pair reading はどの段階でさせたらいいのか教えてください。

A: 教師の読み方を聞いて真似る chorus reading から始めます。次に自分で読み、仲間にも聞いてもらう。対話であれば、ペアで読みながら「表現読み」を試す。そして、話す力につながる Read and Look Up へと発展させるのが良いでしょう。

解説: 本文を理解した後に、書かれている文字情報を音声化します。暗記をさせないとしても、文の音の響きを、意味と共に短期記憶に取り込む努力をするためにも、音読は、彼らにとって大切な練習です。

まず Chorus Reading です。一斉読みで、自信のない生徒もつられて読みます。既成の音源を真似させるのではなく、教師がモデルになります。感情を込めて読むことも、生徒が真

似をしやすくなるために必要です。生徒が間違えたところで、ポイントを強調して読み直すなどの手当ができるのは、生身の教師だけです。

次に **Buzz Reading** を行います。生徒自身で一斉音読の復習をする場面です。自分が上手く読めないところの確認もできます。またこの間、机間巡視をして、生徒の様子を観察します。多数の生徒がする間違いなどを拾い上げて一斉練習をし直すこともできます。

さらに、**Pair Reading** です。対話文では **Role Reading** になります。役割を交代して読ませます。説明文であれば、ひとりが読み、相手に聞いてもらったり、同時に読み読み終わる早さを競ったりさせます。これらのメリットは、緊張せずに聞いてもらえるということです。また、互いに上手く読めるところや弱いところを確認し合えることです。さらに、内容理解が十分でない箇所を確認し合うこともできます。

ここまで、既に本文を4回読んでいることになります。音読をたっぷりさせるために、手を替え品を替え、さまざまな方法を用いて飽きさせないで練習をさせます。そのためのいろいろなテクニックなのです。同時に読み始め、読み終える速さを競わせることもできます。それらの練習の上で **Read and Look Up** を行えば、ほとんどテキストを見ないと言えるようになっていくことに、生徒自身が驚くでしょう。そして、そのあとに、本文の文を抜き出して **Writing** をさせるなら、これもスラスラ書けるようになります。

このような練習は、基礎練習です。スポーツで言えば、筋トレです。自由に発言させたい、自由に書かせたいと思っても、その前に、英語が英語のまま彼らの頭に入っている必要があります。(25 July 2020)

7. Read and Look Up は中学生に難しい？

Q: Read & Look Up は中学生には難しくありませんか。

A: 指導の順序を守れば、そう難しいことはありません。

解説: R&L は、長い文を記憶に残す練習です。長い文に耳と口を慣らし、話す力を伸ばすために有効な練習です。もちろん、内容が理解できていないテキストで行えば、大学生にも難しいと思います。

まずテキストを理解させ、次に音読練習をしっかり行い、最後に Read & Look Up をすれば、大丈夫です。

だいたい7語までが短期記憶に残せる限界だとも言いますから、時には、途中で文を切っておく必要もあるでしょう。中3くらいになると1文が長くなるので、接続詞の前など、あらかじめ切る箇所を決めておくことも必要になります。

中1のころから、簡単なテキストで習慣づけていけば、長い英文でも頭に入るようになるものです。(19 April 2020)

8. 教科書はいつもリスニングから始める？

Q：本文の内容理解をするときには listening から入るのが適当ですか。

A：中学校では、たいていそうです。でも、中学校高学年や高等学校では、扱う題材によって、導入もさまざまな形を取ることができます。

解説：高校の教科書では、教科書の単元が、読むための素材で始まる場合が多いかもしれませんが、エッセイのような抽象度の高い内容だったり、物語のように、場面を少しずつ想像しながら読みすすめる内容だったりするのなら、授業の最初に音を聞いて理解させることは不自然です。

一方、本文が対話であり、具体的な内容を扱っているならば、聞くことから始めて良いと思います。まず、誰が話しているのか、話題は何かといった、場面や背景的内容だけを聞き取ることから始めます。「何でも良いから聞き取れた語や句を言ってごらん」と言うやり方は、学力の低い生徒が発言しにくくなります。場面や対話の背景などが理解できてから、次に *guiding questions* を与え内容に迫るように、段階を踏んで指導します。(25 April 2019)

9. 進出単語の導入

Q：模擬授業をしてみて、新出単語をどのタイミングで入れるのかが、難しいと感じました。生徒は、新出単語が分からないと、聞き取れなくなってしまおうと思います。

A：原則的には、やはり、教科書を開き、本文を初めて見たときに、新語の練習を入れることが最も妥当だと思います。

解説：もちろん、Listening で意味を推測させることから新語の導入へと展開することもできなくはないと思います。その語が具体的な意味を持っていて、場面が具体的で、曖昧さが少ないならば、です。でも「何か聞こえた語があるかな」という問いかけは、元来、内容理解を目的とした listening 指導の一部であり、新語の導入には向かない場合も多いと思います。ひとつのパッセージに3つも4つも新語があるようでは、大まかな内容推理も難しくなります。(クラッシュェンの言う“i プラス1”と同じことで、理解可能なインプットにすることが必要だからです。)

中学生のように語彙や表現の知識が少なく運用力が十分でないうちは、推測できる範囲も狭いものです。中学校低学年のうち、新語については、口頭のドリルをたくさんして、英語耳と英語舌を作ること。初級学習者にとって口慣らしは、「思考・判断・表現」と同様に大切です。どんどんさせましょう。(23 May 2019)

10. 小学校での既習事項を中学校でどのように扱うか

Q：これまで中学校では、小学校で学んだ内容でも1から教えるという印象がありましたが、これからは、教師は、小学校で学んだ内容も頭に置きながら復習+新しい知識というイメージで教えれば良いのでしょうか。小学校で学んだことを中、学校ではどのように扱うのがよいでしょう。

A：そのとおりです。小学校で学んだ表現を、中学校では一般的な文法規則として整理できるようにしてやり、使い道を広げてやるのが教師の仕事です。

解説：今年使っている中学校教科書は、平成25年に検定を通った、まだ旧課程のままの教科書です。旧課程の小学校外国語活動では、生徒は英語に慣れ親しむだけでよかったので、中学校の英語教科書も、小学校外国語活動の成果をあまり前提としないで編集されています。ですから、小学校で扱ったことも、イチから学ぶような形になっています。

2017年までは、小学校外国語活動は5・6年生が対象でした。でも、新学習指導要領で教科としての外国語が入ることを告示してから、文科省は小学校5・6年生の外国語活動に力を入れ、週2時間授業をすることを目指すように、日本中の学校に要請しました。2021年から中学校では新指導要領に基づき、小学校外国語科を学んだ生徒を対象に授業をすることになるからです。来年からは、教科書もそういう作りのものになります。

平成29年ぐらいまでは、小学校の外国語活動も、学校によっては、たいして熱心でないところもありましたが、上に述べたように、旧課程から新課程に橋渡しをする時期、いわゆる「移行期」を経験した子どもたちが中学校に入っています。小学校である程度の英語が理解でき使えるようになったことを前提として、小学校と中学校の英語指導をつなぐように、中学校教員が意識をしていく必要があります。

例えば、中学校1年生の small talk では、小学校で学んだレベルの英語を使って、楽しく日常のことを語る体験をさせます。また、文法の導入でも、今日の竹之内さんの授業のように、生徒が want to を知っていることを前提に、不定詞という文法概念を得られるように導く工夫をすることが望まれます。

繰り返しになりますが、小学校の want to は「行きたい、食べたい、～になりたい」という程度の、限られた場面に使う表現として入ります。場面を変えて応用ができる知識ではないと思ってよいでしょう。でも、中学校では、want to のあとにはさまざまな動詞が来る、いろいろな欲求を表現できる、と、一般的な法則があることに気づいてもらう必要があります。さらに、to + 動詞の原形は、他にも使い方があるのだということも学ぶことになります。

教科書によっては、副詞的用法の不定詞を最初に出すものもありますが、小学校での指導を踏まえ、不定詞の名詞的用法をさきに教えるように単元計画を立てるのも、ひとつの良い考え方です。名詞用法の want to を先に扱うことで、小学校での want to の学びを生かして中学校の不定詞につなげやすくなります。(21 May 2020)

11. 本文について発問する際に、未習の文法表現を使ってよいのか。

Q: 本文の listening をする際の発問として、must や have to を含む文の内容を聞きたいのですが、まだ must と have to の疑問文は習っていないので do they~ の形で聞いてもよいでしょうか。

A: 授業での本文の導入として listening をするのであれば、これから学ぶ語彙や文法表現を用いない方がよいでしょう。ただし、どう言い換えるかは、慎重に考えてください。

解説: 本文に入る前にリスニングをするというのは、細かな内容を理解させるためではなく、場面や話題、登場人物などの概要を掴ませるためです。これが、いわゆる General な Questions と言えるでしょう。ここでは、細かなことを尋ねないのです。またさらに、何度も聞かせて内容理解を求める流れになるとしても、当然、新しい事項は発問には含めることはできません。新出語に関わることは避け、文法事項も新しいものは使わないようにします。

例えば、発問に have to や must の助動詞が使えないなら、とりあえず do を用いて質問をするのも、ひとつの手です。しかし、それ以前の単元で何を学んで来たかを考慮してください。たとえば、be going to を既に学んでいるのであれば、それを使うほうが do を使う不自然さを避けられるかもしれません。

いずれにせよ、新出語、進出文法事項を知らないまま、聞け、読めと要求するのは、かなりきつい作業になってしまいます。新出語と進出の文法事項が1ページにいくつもあれば、何度聞かせても内容の推測は難しくなります。リスニングで新しいことを知らなくても推測できることと、テキストを読んでじっくり考えて理解させたいことを、きちんと分けてください。(20 April 2020)

12. 文法の導入、本文を扱う前か後か

Q: 文法指導を本文に入る前にするのと、後にする場合がありますが、その判断基準を教えてください。

A: 文法重視の授業か、内容重視の授業かによって異なります。

解説: 内容理解中心の授業であれば、本文を先に理解することから始めます。あるレベルの英語が入っている中学校3年や高校生であれば、内容中心で勤めるのがよいと思います。Oral Introduction は内容本意で進め、本文を精読する際には、新しい文法事項に軽く触れ、本文が済んだから、改めて文法を丁寧に扱うというやり方です。

一方で、特に中学校低学年のうち、本文の内容はあまり深くありませんが、文法は毎回、新

しいことばかりです。このような場合は、文法や新出語句を練習しているうちに、本文のほとんどは理解できてしまうでしょう。先に文法項目を扱ってしまうほうがよいわけです。ただし、その場合も、本文からあまり離れないような話題を選ぶ必要があります。

ただし、中学校低学年でも、文法の規則を学ぶことがゴールではありません。どのような場面でその規則が使われるのかを理解し、実際に使えるようになることが目標です。そのためには、本文を和訳して終わる授業ではなく、本文と同じような場面で本文と同レベルの英語が理解でき、同レベルの英語が使えるようになること、そしてさらには、さまざまな場面に合わせ、それらの力を応用できるようになることを目指します。(19 April 2020)

13. Oral drill の考え方

Q：音読の練習の際、「リピートして口に出しても脳を通り抜けてしまっている」場合があると聞きました。文法の oral drill の場合も、回数さえこなされていれば drill が十分に行われたと判断していいのでしょうか。この項目に評価をつける際、毎度悩んでしまいます。

A：機械的な oral drill だけでなく有意義な oral drill も必要です。そこまでして十分と言えるでしょう。

解説：Oral drill の場合、その前に、場面と状況のある導入が必要です。そして基本的なパターンを言い慣れるために声に出して、滑らかに言えるようにします。そのあと、意味のある場面での oral drill が必要になります。どちらも oral drill です。機械的な drill だけではアタマの中を通り抜けてしまうことがあります。有意義な(meaningful) な drill がそのあとに続くことによって、効果があると考えます。有意義な表現が続くかどうかで、十分か不十分かが見えてきます。滑らかに言う練習なしに有意義な drill に行けば、なかなか上手く言えないことが多いはずで、その場合も十分とは言えないことにあります。(20 May 2020)

14. Small talk での文法導入で、生徒にもっと考えさせたい。

Q：Small talk で新しい文法事項について、たくさんインプットを与え、生徒に自由に話させ考えさせるようにして導入したいと思います。どうしたら可能でしょうか。

A：Small talk ではそんなに欲張らないでください。Small talk は文法導入のためではなく、場面をしっかりと作って楽しく意味のあるやりとりを教師

と生徒がする場です。新しい文法項目の導入は別に設け、インプットをしっかりとコントロールして行ってください。

解説：確かに、場面をしっかりと作ってたくさんのインプットを与え、規則に気づかせることが必要です。また、規則に気づいたかどうか仲間と日本語で話し合うことは、認知学習の上からも意味があります。でも、その規則を使わせながら考えさせるというのは、ひとつ次の段階です。

ところで、授業のはじめに small talk を行います。Small talk というのは、先生や生徒同士で楽しく英語を使いながら、それまでに学んだ語彙や表現や文法規則を、試す場です。既に学んだものが生徒の実力として定着していくために必要なことです。

新しい文法事項の導入は、small talk とは分けて行ってください。生徒が文法の知識をまだ十分に持っていない段階では、少しずつ "気づき" を促すことから始めます。新しい規則、例えば、過去形を導入する場合、まず生徒に、「ああ、先生は過去のことを言っている」と、"場面" に気づかせることから始めます。次に生徒は、「先生は、過去のことを言うために動詞のかたちを変えている」と、"形" に気づくことになります。この2段階の気づきの順序を踏むことが大切です。

新しい文法項目を含む文を聞いたり、使ってみたりするのは、small talk とは別の、oral introduction という指導です。でも、インプットを与えただけでは、生徒には、何となく、過去を表す言い方のイメージが湧くだけでしょう。そこで自由な会話をさせようとするのは、飛躍しすぎです。初心者にサッカーの試合を見せただけで、「さあ、ピッチに出て試合してみよう。どんなふうにボールを蹴るといいのか、やりながら考えてみよう」というのと同じで、無理ですよね。

英語も技能が必要な科目です。技能というものは、何となく理解した知識だけで自由に会話しても、身にはつきません。場面のあるインプットにたくさん触れて、学習者は規則に気づきます。そして自分の頭の中で、「こうすれば過去のことを言えるはず」といった "仮説" を立てることになります。そして、その仮説を試す、つまり過去形を使ってみることになります。ですから教師は "仮説" を試す場を与えます。それが授業なのです。

まず、過去形にしっかりと焦点を当てた練習をするのですが、すぐ生徒同士で試してみることは難しいので、先生対生徒で、形に焦点を当てた、意味のある短い会話をするようになります。この対話練習の中で、生徒に考させるように仕向けることが可能です。

自信を持って過去形を使えるようになったら、初めて、生徒対生徒の自由な会話をさせることができます。その段階に至るまでの練習を軽んじてはいけません。教科書のテキストも、場面のあるインプットを与えてくれます。必要な活動です。

授業の "導入" は、まず「知識、技能」を身につけるための場です。「場面や状況をうまく活用し定型文だけではなくて、生徒の考えを取り入れながら言語活動をする」というのは、新しい学習指導要領で言う2つめの柱「思考・判断・表現」のレベルのことになります。(19 April 2020)

15. では、Small Talk では何をするのだろう。

Q: Small Talk と Introduction を分けるならば、Small Talk は何をすればよいのでしょうか。

A: Small Talk は、生徒にとって、ずっと学んで来て身についた英語力を自由に試す場です。小学校なら先生の話聞いて反応するだけでもよいでしょう。でも中学校や高校になれば、先生の役目はその日のトピックを与えるだけで、生徒たちにイニシアチブを渡しましょう。

解説 1:

専門家によって意見が分かれるかも知れませんが、小泉の考え方では small talk は別の目的を持った活動になります。

授業の展開は、あいさつ、ウォーミングアップ、帯活動、いろいろしてから本文に入ります。授業の始めに歌を歌ったりジャズチャンツの練習をしたりなどすることは、ウォーミングアップ的なものです。英語の授業の始まりの雰囲気を高めます。また、教科書と関係ない「帯活動」と呼ばれるものもあります。Small Talk は、それらに近いものと考えてよいでしょう。

Small Talk は、生徒にとって、ずっと学んで来て身についた英語力を試す場です。小学校なら先生の話聞いて反応するだけでもよいでしょう。でも中学校や高校になれば、先生の役目はその日のトピックを与えるだけで、生徒たちは自由に発想して英語で表現する場にできます。また時には、生徒が話題を提供するのもよいでしょう。

もちろん、生徒たちが「言いたいのに上手く表現できない！」という場面では、先生がリキャストしたり足場掛けをしたりしながら支援します。自分の英語が使えることばだという実感を、生徒が持てるようにするのが Small Talk での先生の役目です。

日本のような環境では、英語で自由におしゃべりをする機会は極めて少ないので、生徒自身が主体的に英語が使える貴重な時間なのです。

解説 2:

前時の内容や言語材料を「復習」するときや、教科書の内容に入る前の introduction (導入) は、先生が計画的に準備をします。予定した内容理解や新言語材料の習得に向かって先生がイニシアチブを取って進めるので、本質的に Small Talk とは違います。

もちろん、本文の題材によっては、Small Talk でも本文に関連する話題を取り上げることができるでしょう。それは、本文に入る前の readiness を高めます。たとえば惑星探査衛星「はやぶさ」を扱った単元なら、Small Talk で太陽系惑星のことを話題にして構いません。でも、そこで何か言語材料を教えたいと考えるなら、それは introduction でしてください。生徒の自由な思考・判断・表現を保証する活動ではなくなるのです。

次の 6 項目を意識して欲しいと思います。

1. 授業のウォーミングアップ。先生も生徒も自由に英語を使って盛り上がる場である。

2. それまでに学んだ英語を駆使し、自分の日常の報告、意見などを英語で表現できると実感させる場である。
3. 生徒が安易に「日本語で答えても良いよね」と考えず、自ら努力する場になるよう、教員の支援が必要である。
4. 英語で言えない表現は、生徒自身がうまく回避してコミュニケーションを続ける努力をする場である。
5. 生徒がうまく言えないときには、corrective feedback を行って、援助する。
6. 内容の復習や言語材料の導入は、ウォーミングアップとは別に、体系的に行うべきものである。

16. 授業内評価のポイントはどこで見極めるか

Q： 授業内評価について、授業での評価するポイントをどうやって決め、どの活動で見極めるのか、評価の仕方について教えてください。

A： 単元目標と単元の評価基準を、アイウエの観点別に沿って設定することになりますが、その際に、各時間内でどの活動がどの評価の場面になるのかを、併せて考えておく必要があります。

解説： 英語科教育法の模擬授業では、授業作りが第一の目標ですので、授業内の活動と評価を結びつけるところまでは扱っていません。しかし、それでも次のように考えることで評価のポイントは見えてくると思います。以下は、現行の指導要領に基づく観点別のポイントです。

- ・「～ことができる」という言語能力を見るためには、生徒に言語活動をさせてみる
- ・「積極的な態度」を見るためには、生徒を観察したり振り返りシートに書かせてみる
- ・「言語や文化に対する理解・知識」は、発表の状況や作成する物を通して確認する

例えば、職業体験を扱った単元では、ア（態度）「就きたい職業についてクラスメートと積極的に話合おうとしている」という項目を設定したなら、クラスメートとペアで対話させたり仲間の発表を聞かせたりしながら、教師はその様子を観察し、記録することになります。また、イ（表現の能力）で、「自分が将来なりたいものを、理由を添えて書くことができる」という規準を立てたすれば、単元が6回の授業だとしたら、そのうちのどこかでそれを書かせてみることになります。

2021年度からは、新指導要領に基づき、「知識・技能」、「思考・判断・表現など」「能動的な態度（自主的で深い学び）」の観点から、単元目標を立てることになります。

詳しいことは、参考図書などで学んでください。図書は個別指導で紹介します。

17. 英語の授業で生徒をどう呼べばよいか

Q: 文科省の動画では、直山先生は自分を〇〇sensei と呼んだり、子どもたちを〇〇san?と呼んでいます。一方、光村図書の教科書 *Here We Go!* では、教員には Mr. や Ms を付け、子どもたちをファーストネームのみで呼んでいます。どちらがふさわしいのでしょうか？

A: 結論から言います。どちらでも良いのです。ただし、これは言語と文化に関する意識に関わることで、小さなことではありません。同僚とよく相談し、一貫性を持って指導してください。

解説: ある言語を学習する集団（ここでは日本の教室）と、その言語の母語話者の間の文化の差が原因で起こる疑問です。一概にどちらが適切かを言い切ることは難しいと思います。

直山先生の方法は、ひとつの考え方です。英語の授業を普段の他の学校生活と同じ呼び名ですることになるので、最も楽な方法だろうと思います。

また、光村図書の方法も、ひとつの例です。一方は、文部科学省の直山先生の DVD でありもう一方は、教科書検定を通った教科書ですので、どちらが良くどちらが間違っているかということではありません。

日本の小学校では、教員が自分のことを子どもたちに向かって「先生のほうを見なさい」などと言うことが普通にあります。日本語の文化のひとつとして、自分を指す一人称に自分の役割の名詞を使うことがあります。その日本文化の中で英語を学ぶなら、普段の学校での呼び方と英語の授業での呼び方が異なることは、不自然、やりにくいと感じることがあります。教室はひとつの社会であり、教員と子どもたちの人間関係がことばにも表れます。普段使っている「先生」ではなく Mr. や Ms. を使い、子どもたちを first name で呼ぶことは、教員と子どもたちの双方にとって、普段と異なる、不自然なものに思えるのなら、他の授業と同じほうが良いではないかと考えても不思議はありません。

さらに、小学校の中には、子どもたちを人として尊重するためとして、子ども扱いをしているような響きがあるファーストネームを避け、男子女子を問わず「苗字+さん」で呼ぶことを実践するところもあります。そういった学校ではなおさら、英語の授業だけ英語圏文化のような言葉遣いにするには抵抗があるようです。

しかし一方で、英語の授業では英語と英語話者の文化を学ぶことに意味があるとも考えられます。つまり、英語の授業だけは英語の世界、という考え方です。普段の授業で「〇〇先生」と呼ばれている人が、ALT とは first name で呼び合うのも、子供たちにとってささやかな、ちょっと驚く異文化体験になると思います。

でも、こどもたちは ALT をファーストネームで呼ぶことができても、担任まで呼び捨てにはできません。ですから、多くの小学校で、英語の時間も、担任の先生は「苗字+せんせい」で、ALT は「ファーストネーム+せんせい」で、という妥協案が生まれています。理解できることです。

私は、英語授業で英語を使っているときの形としては、次のようなことが良いのでは、と

考えています。もちろんこれも一例です。

- ・ 教員と ALT は互いにファーストネームで呼び合う。
- ・ こどもは、教員と ALT に「～先生」と呼びかける。
- ・ 子ども同士は、ファーストネームで呼び合う。
- ・ 教員と ALT は、子どもたちにファーストネームで呼びかける。
- ・ 教員は自分を「先生」と呼ばないこと。英語は I だけです。

どのような形が最もよそよそしくなく、すっきりするか、考えてください。もちろん、どちらを選ぶにせよ、同僚教員と歩調を合わせることが大切です。先生方の中でよく話し合っ
てほしいと思います。そして子どもたちには、「英語を使う人たちはファーストネームで呼
び合うことでお互いに親しくなろうとするのです。それが英語圏の生活の中では良いマナ
ーなのです」と、きちんと説明した上で、「英語の時間は普通の授業と違うことを試してい
いんだよ」と伝えてください。

もはや、アメリカやイギリスの文化に憧れて英語を学んでいた時代ではありません。英語
圏に合わせる必要はないのです。でも、英語を学ぶ際に、自分らの文化の中だけで完結する
ような英語授業を作ってしまうことは、英語をただの記号体系にしてしまう恐れも伴いま
す。英語に限らず、どのような言語もそれを使う人たちがいて、その人たちにはそれぞれの
文化があるのです。言語を学ぶことは、それを使う人たちの文化を学び、その人たちと理解
し合うことでもあるのですから。

18. 生徒の気づきを促すにはどうするか？

Q : 生徒に気付いてもらうためには、教師はどのような誘導ができますか。いつもどのように誘導をしたら、気づきを生徒にしてもらえるのでしょうか。

A : ターゲットになる文法項目を、自然な場面と状況を設定して、了解可能なインプットに含めて与えます。特に、既に学んだかたちと対比できるようにしてインプットすることが効果的です。

解説 : 例えば、目的格の代名詞 him と her を導入する場面です。有名人の写真を出して尋ねます。

T: I like Audrey Kasuga. I like him very much. He is nice. Do you like Kasuga, S1?

S1: No.

T: NO! Why not? You don't like him? I like him! He is my hero. S2, please say, "I like him".

S2: No. I don't.

T: All right. S3? Do you like him?

S: I like Wakabayashi.

T: Oh, you like him. I don't like him very much.

このように同じような質問を繰り返し he, him を使いながら、多くの生徒に当てます。そのうち、固有名詞でなく he, him を使う生徒が少しずつ出てきます。正しく使えたら、ほめてやり、その生徒の発言をリピートします。何人もの生徒が代名詞を使って答えるようになったら、今度は女性芸人を出して she, her をたくさん聞かせます。今度は、he, him と対比ができるので、気づく生徒の反応は早くなるはずです。

19. 文法を習得させるために、インプットやアウトプットは十分なのか。

Q : 疑問があります。〇〇さんの模擬授業のあとの振り返りの時、文法規則を最初から教えるのではなく、気づかせることがポイントだという話がありました。それがこれらかの英語教育が目指すべき姿だと感じます。しかし、試験のためを考慮すると、文法に関するインプットやアウトプットが足りないのではないかと感じます。(特に私が学んだ中学校や高等学校の英語の授業では、文法の形を提示し覚えさせるだけで、話す、書くという活動は全くなかった) その場合は、やはりドリルやホームワークなどのもので補うべきなのでしょうか。

A : ドリルは文法の型を定着させるために役立ちますが、それだけでは応用力はつきません。ホームワークはやらせっぱなしでなく、事後のフィードバック次第で効果が違ってきます。やはり具体的な場面のあるインプット (listening と reading) を理解し、アウトプットを与えることで文法知識が運用力になっていきます。

解説 : ドリルや暗記が役に立たないわけではありません。外国語は、母語とは違い、短期間に集中的に学ぶことで効果が上がります。また、文法などの規則については、良質なインプットを与えられ、理解した上で練習することが認知面での効果を上げることも事実です。ただし、柔軟な応用力は、内容のあるアウトプット (speaking や writing) を十分にさせることで身につきます。結局、入試は、学校の定期テストとは違い、応用力が勝負です。

もちろん、受験のことを考えない訳にはいかないでしょうから、受験しようと思う大学の出題傾向を見極め、文法や表現の知識を問う問題が多く出題されるのか、柔軟な応用力を問う問題が多く出るのかをよく知って準備をすることが大切なのは言うまでもありません。